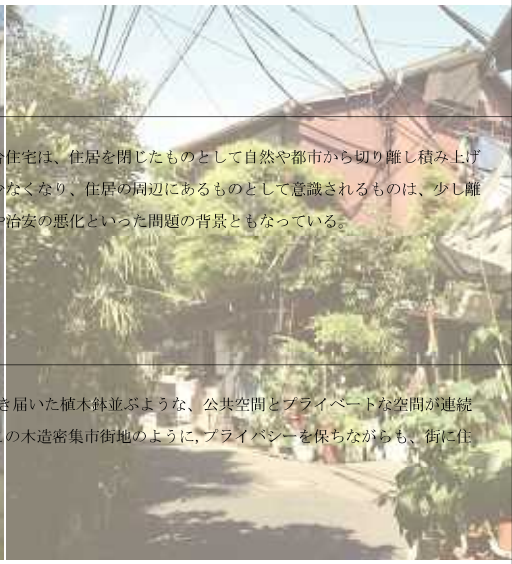
開かれた都市住宅へ

towards an open urban house

木造住宅密集地域における内部空間と外部空間の関係の観察をもとに



0.序

現代人は開かれた状態を嫌って、機械のように制御できる文明を好む傾向にある。今日の都市に乱立するタワーマンションに代表される多くの集合住宅は、住居を閉じたものとして自然や都市から切り離し積み上げているため、住居の周辺に生活が滲み出せるような半公共的な空間がほとんどない。住居を完全に閉じることによって公共の意識が生まれる機会は少なくなり、住居の周辺にあるものとして意識されるものは、少し離れたコンビニや駅などのみである。このような個別化社会による地域の互助機能の低下や地域住民であるという当事者意識の希薄化は、人心の荒廃や治安の悪化といった問題の背景ともなっている。

1.目的

そのような今日においても、月島地区に代表される木造住宅密集地域のように、複雑で奥行きをもった路地に洗濯物がはためいたり、手入れの行き届いた植木鉢並ぶような、公共空間とプライベートな空間が連続性をもった地域はいくつか残されている。またそこでは住民の地域や都市への帰属意識によって成熟したコミュニティが守られている。本研究ははこの木造密集市街地のように、プライバシーを保ちながらも、街に住んでいる共存関係や連続感を実感することのできる住居および周辺環境を計画することを目的とする。

2.木造住宅密集地域の観察

東京都における代表的な木造住宅密集地域を中心に、路地および住宅の観察を行った。

月島

根岸三・四・五丁目

京島

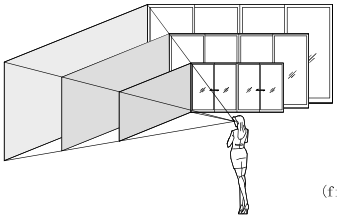
谷中二・三・五丁目

3. 観察から

住宅内部と路地や専用庭との連続性、自然発生的におきた住民による緑化や屋外での生活行為、私物の溢出しに注目し、そこにみられる内部空間と外部空間との関係をもとに、町に住んでいる共存関係や連続感を、プライバシーを保ちながら得るための空間構成の要素の抽出を行った。

3-1. 近景に合った小さなスケール

狭小な路地住宅は、建物が眼前に迫るためか、建物が視覚的にスケールアウトしないようにより小さな単位で細かく構成されている。このようにして狭小感や圧迫感が軽減されている例が多く見られた。似た例として籠の開口部であるミニチュアのような障子があげられる。この障子は狭い籠の内部に入り、眼前に来たときに最適なスケールとなりる。また細かく調節できるつくりとすることでことで狭い空間に快適性をもたらしている。(fig. 1)



(fig. 1)

3-2. 手の届く範囲の空間を細かく調節できる構成

手の届く範囲にある空間を小さな窓や棚等で細かく調節できるようにすることで、狭小なスペースだからこそ可能な身体感覚に繊細に対応する空間がつくられている。

3-3. 建物の外壁周りでの行為と内部と外部の関係

外壁周辺に棚が作られていたり、物や植栽が溢れ出して、そこがバッファーゾーンとなって、内部と外部の境界が曖昧になり、両空間に広がりをもたらしている。

3-4. 常にライブな状態の立面

時刻や季節によって更新し続ける要素を外壁周辺におくことで、立面は常に変化し時間的な奥行きを感じられる路地空間をつくっている。

3-5. レベル差のある路地を利用した住居の構成

路地のレベル差を利用して外部からの視線を遮ったり内部空間の機能を拡張したりして、内部空間に距離感をつくっている。

4. 計画概要

都心から電車で10分ほどの距離にありながら、戦災を免れた古い木造２階建ての町屋が並び、下町の風情を残す町、佃一丁目。周囲を堀に囲まれ独立し、細い路地と小さなスケールで町全体が構成されている。現在、超高層マンション群に周囲を取り囲まれ、その対比の効果で独特のスケール感がより際立っている。この小さなスケールでできた町に、観察から発見したテーマを反映させながら、新たな狭小密集集合住宅を設計する。

5. 設計手法

5-1. 外壁の複雑化

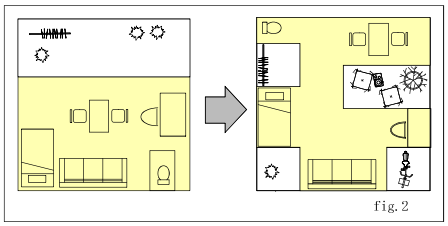
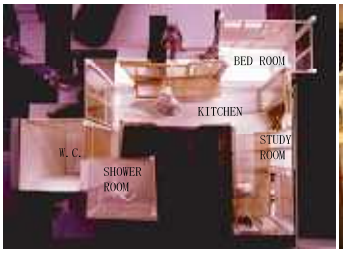


fig. 2

狭い敷地から無理やり広くまとまった内部空間を獲得しようとするのではなく、外壁を複雑化して住宅内に外部空間を取り込み、小さいながらも光や風を感じられる快適な空間をつくる.(fig. 2)



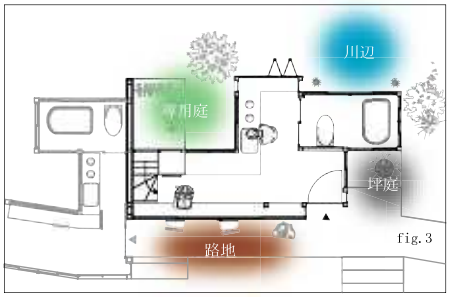


fig. 3

ひとつの住戸が、川辺、中庭、路地等性質の異なった多様な外部空間と接続することで広がりをもつ。また、それぞれの外部空間に出入り口を設けることで、圧迫感を軽減する。(fig. 3)

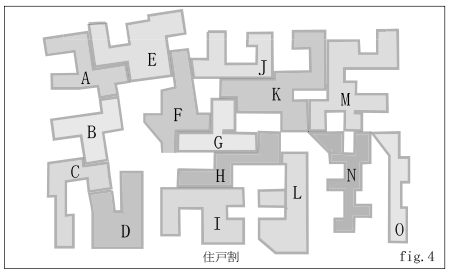


fig. 4

細く長く複雑に枝分かれしながら伸びた住戸を、複雑に絡み合わせることで、狭小ながら奥行きのある空間をつくり出す。(fig. 4)

5-2. 外壁の家具化

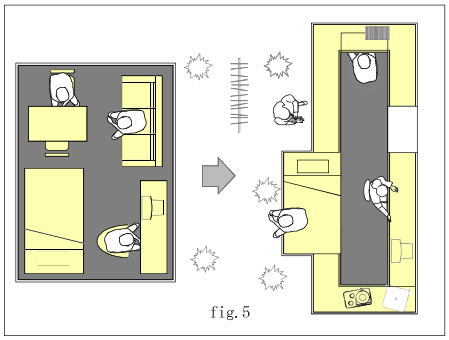


fig. 5

家の外周部が家具となり、行為の中心となることで、内部の行為は外向きに、外部の行為は内向きになり、内と外が関係付けられる。敷地の狭小性を克服しながら、内部には常に窓辺にいる広がりを感じる生活空間ができ、外部には路地を豊かにする気配や行為、モノの溢れ出しが起こる。(fig. 5)

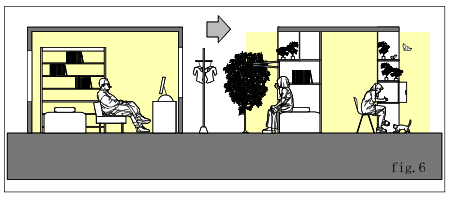


fig. 6

外壁で明確に内外を区切ると、行為はその中でのみ完結し狭い室内はより狭くなる。立面は全く更新しない。外壁を家具化することで、活動の中心が外周りに移り、生活領域が内外へと拡張する。また、内外のバランスを住人が細かく調整しながら生活することで、住宅の立面がライブな（更新し続ける）状態になる。(fig. 6)

5-3. 開口部の細分化

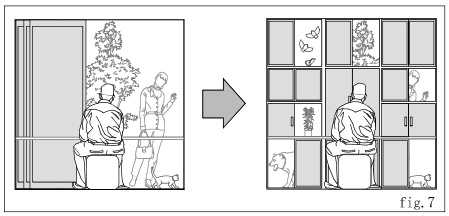
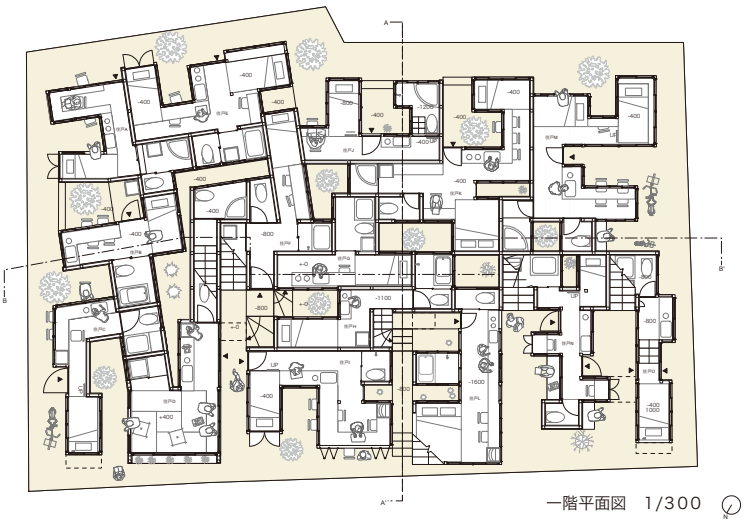


fig. 7

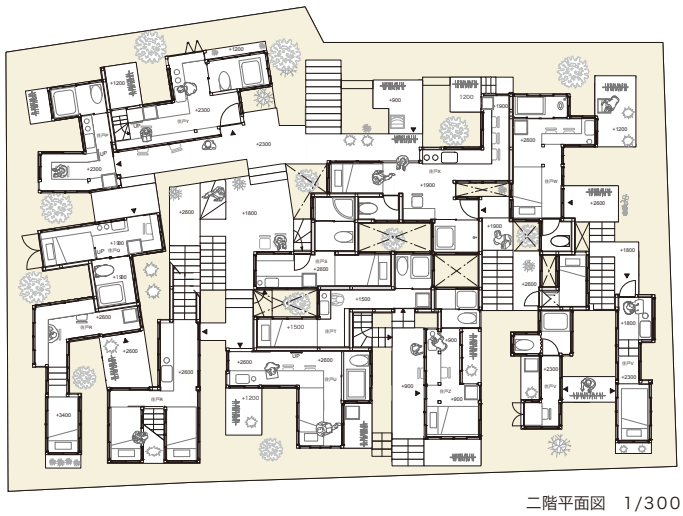
狭小な住戸内では窓が眼前に迫り、またその窓は手の届く範囲にあるため、細分化し、細かく調整できるようにすることで、狭小なスペースだからこそ可能な身体感覚に繊細に対応できる空間をつくる。(fig. 7)

5-4. 内部空間と関連したレベル差のある外部空間

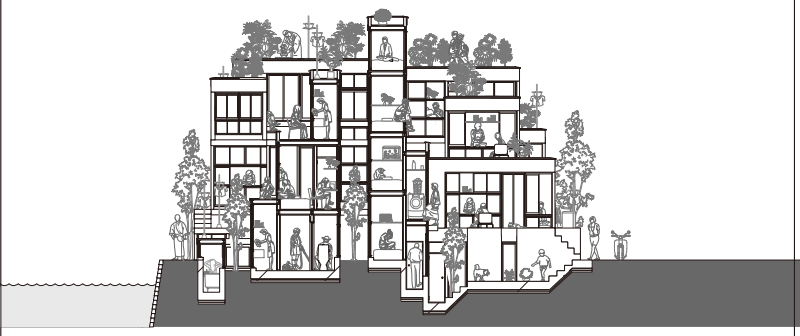
内部空間のプライベートな空間はパブリックな空間とアイレベルをずらして距離を保てるように、キッチンやリビングなどパブリックに近い空間は外部に拡張できるように床レベルを設定する。また、家具化された外壁と、それに対応した開口部と関連付けて、外部空間にも活動の領域が広がりやすい構成とする。



一階平面図　1/300



二階平面図　1/300



A-A' 断面図　1/300

B-B' 断面図　1/300

西側立面図　1/300

南側立面図　1/300

東側立面図　1/300

北側立面図　1/300